

アルジエの知恵袋

其の貳

「NPO」に必要なもの

経営とは、正しいことを上手にやる



内閣府によれば特定非営利活動促進法により認証されたNPOは全国で2007年12月31日現在、33,389団体もあるという。3年前は約15,000団体であり、この数年間の急増ぶりに「ほんまかいな」とビックリした。これだけ増えると、「その中身はどうかいな」、「きちんと経営できているのだろうか」と心配する。「えっ、NPOに経営が必要ですか?」と勘ぐる人たちは「即、退場」。21世紀は「想いだけでNPOが継続できる時代ではない」です。今、NPOに「必要なものは「経営する」ということです。そして「一番欠けているものも実はその「経営する」ということです。」

2005年6月、小野加東青年会議所がエクラホールで講演会を主催しました。講師は神戸大学の加護野忠男教授、テーマは「事業コンセプトをつくる」。第一部、青年会議所メ

バーによる「経営」とは、「正しいことを上手にすること」という加護野先生のメッセージをおもしろおかしく演じていました。第二部は加護野先生の講演会。大企業や中小企業のいろいろな事例を紹介され、中小企業の経営者である我々聴衆を励まして下さいました。「あまり難しく考えないでとにかくやってみなさい、経営って実はそんなに難しくはないんです、売る側の理屈で事業の構想をつくとダメ。顧客の立場に立って顧客が何を求めているかを考えて事業の構想を作ると良いのです。」

と、「私も加護野先生の話聞いて、経営って、正しいことを上手にすることと教えられ、以来、会社でもそのように実践したいと考えてきました」という発言を聞き、「へえ、田舎のおっちゃん社長の心にも響いたやな」と感動しました。

「非」営利が「非」経営に結びつく危険

NPO(Non-profit Organization)について。ピーター・ドラッカーの有名な書物『非営利組織の経営』に、毎年の目標を定め、5年後の姿、10年後の姿を明確に意識すべきであるにもかかわらず、「分ける人が地道にやっていたらいい、特殊なものだから地域全体の人たちにその良さを理解してもらうのは難しいよね」というような進め方では「戦略として最低というべきである」。また「非営利機関は内向きになりがちである。自分たちは正し



いことをしているという自負を持ち、その奉ずる大義に全身を捧げているために、組織自体を目的と見してしまう。しかしそれは官僚主義に他ならない。そのうち組織内の誰も「それは自分たちの使命に過っているか」とは問わなくなる。代わって、「自分たちの内規に過っているか」と問うようになる。これでは成果を生まないばかりか、ビジョンも献身も破壊されてしまう。」



② 顧客志向

支援センターの日々の運営の随所に企業経営のノウハウを取り入れていること。職員の皆さんや理事の方々に「顧客志向」の意識が徹底されていることが、電話の応対一つを見てもよく分かります。

つまりNon-profitがNon-Managementに結びつく危険があることを強く意識し、この様な自体に陥らないように努力する必要があります。あることと困っているんだが」という相談に対して「このようにされたらどうですか」という答えとともに「別にはこういう方法があり、こっちの方があなたには向いていると思います」と、一歩先の提案がある。実は筆者もそのように提案を貰い、ありがたかった経験がある。驚きや発見があるという点で支援センターはソリユーションビジネスを実践していると感じた。そして「コミュニケーション能力が高い。」

北播磨市民活動支援センターはどうなのか?

さらに顧客の困っている問題を解決し、さらに一歩先の提案があること。あることと困っているんだが」という相談に対して「このようにされたらどうですか」という答えとともに「別にはこういう方法があり、こっちの方があなたには向いていると思います」と、一歩先の提案がある。実は筆者もそのように提案を貰い、ありがたかった経験がある。驚きや発見があるという点で支援センターはソリユーションビジネスを実践していると感じた。そして「コミュニケーション能力が高い。」

③ 先例とは無縁の団体

理事長が現役の企業経営者だから。でも「退役軍人」のような人が理事長だったら「昔はこうしていた」と言うだけで、先例主義のオンパレードとなつただろう。理事長の「やる気モード」がスイッチオンの状態となつ

ていることをよく感じる。2003年の地方自治法改正の趣旨はNPOや民間企業といった、先例とは無縁の団体が広く指定管理者に採用されることによつて公の施設のマネジメントを効率化したい、という点にある。支援センターは法人税も消費税も納めている。これは利益志向が強く、そのような収益事業を多く請け負っているからであるが、このことが結果的に組織のマネジメント能力を高めることにつながっている。したがって支援センターはNon-profitでもなければ、Non-Managementでもない。

④ 課題

ただし支援センターにも課題がある。たとえば指定管理者としての業務がウエイトを占め、NPOとしての本来の事業(市民活動支援)に対する取り組みが少し遅れたこと(ノウハウが蓄積してきたことにより最近進展著しい)。事業領域を急激に拡大したことにより統一感に欠ける傾向があるが、いわばこれも試行錯誤の「種まき期間」と考えれば、そろそろ収穫時期となり、再度、領域の再構築・再選択が必要かと思つた。

文責、土井嘉彦。

土井嘉彦(どい よしひこ) 小野市在住の公認会計士、神戸大学出身。NPOの会計を熟知している数少ない会計士。NPOを自立させるための活動にも力を注いでいる。

みんなの掲示板

『地鳴りのようなベートーベンの第九から、光の粒が降ってくるモーツァルトまで』

衝撃でした。日本にこんな果敢なピアニストがいたとは。初めて彼の演奏を聞いた時、今までの常識がどこかにとんでしまったような気がしました。年末に演奏されるあの有名なベートーベンの第九、フルオーケストラで演奏される合唱付きのあの曲を、たった一台のピアノだけで表現してしまうとは。勿論、迫力も同じ、ソロが歌いだす息使いまで感じることができました。彼の名は赤松林太郎。日本ではあまり聞かれませんが、昨年東京でメジャーデビューした、今年30歳になる新進気鋭のピアニストです。そんな彼が小野で演奏会を開きます。是非、ヨーロッパの大陸を思わせるようなスケールの大きい、しかし細部まで計算された、ピアノの可能性をひろげる音楽を聴きに来て下さい。4月29日、エクラホールでお待ちしています。

赤松林太郎さんの略歴

- ・1990年(小6)第44回全日本音楽コンクール全国1位
- ・2000年(神戸大学四回生)クララ・シューマン国際ピアノコンクールで日本人初の上位入賞
- ・現在は、日本やアジア、ヨーロッパ各国での演奏活動の傍ら、各地での講座や執筆活動でも定評がある

この掲示板に掲載希望の方は広報委員会または事務局まで。

みんなで作るリレーエッセイ

「ボランティアって?」

「ボランティア」「市民活動」という言葉を、改めて問い直すと、自分の人生の「やりがい」「生きがい」という言葉に置き換えることができるような気がします。もっと言えば、その人の「生きざま」「生き方」ともいえるでしょう。社会のために奉仕をしようと考えると、ちょっと大変なことに思えがちです。そうではなく、自分ができるところをさせてもらう。自分ができないことを他の人から助けをもらう。お互いのやりがい、生きがいで助け合う。ボランティアとは、こういったことだと思います。



今回の執筆者は

NPO法人 北播磨市民活動支援センター 副理事長 後藤 友栄さん

時として、私自身ボランティアという言葉に甘えてしまう時があります。ボランティアだからこれくらいいいとか、責任はないからとか。でもそうではないんです。その人の「生きざま」「生き方」ともいえるボランティアなので、決して手を抜くことなんかはできないはず。楽しんでやったことが、相手の方に喜んでいただける。そんな嬉しいことはありません。ボランティアって何をしたらいいかわからない。私にはできるものはないから。どこに行けばいいの? ボランティアは向こうからは、やって来ません。こちらから少し歩み寄ることができれば、自然と自身の「生きがい」「生きざま」を楽しむことができるのではないのでしょうか?

次は...

おのハートフル歩人会 都筑英治さんへ